

## おわりに

### 榎根 勇

本書に収録した8本の論文は、私がCOE-ICCS環境研究会の主査を務めるようになってから執筆したものである。この間の思考のプロセスを明らかにしておくために、誤植などのごく限られた文言の修正を行っただけで、そのまま8本の論文を、執筆順に並べてある。本来ならこれらの論文を再構成して、私の『環境学』として出版し、広くご批判を仰ぐべきであろうが、それは将来もしも機会が与えられたならば行うことにして、ここではこれまでの経緯を振り返って、5年度にわたったCOE-ICCS環境研究会主査としての私の活動のまとめを行っておきたい。環境研究会メンバー全員が執筆に参加した、環境研究会の最終報告書は、『現代中国環境論』として別に出版される予定である。

私の専門は水循環（または水文学）であるが、これまで環境の専門家であると自ら名乗ったことはない。もちろん環境問題の基本は水とエネルギーであるから、これまで環境問題とは数多く関わってきた。60年代の高度経済成長期に、わが国では「典型七公害」の一つとして深刻な地盤沈下の被害が発生した。地盤沈下の原因は地下水の過剰揚水であるから、私もこの問題に関わるようになった。その関係で、現在もお千葉県の地盤沈下専門委員会委員長の任にある。地下水に関わる環境問題については、東京都、千葉県、茨城県、神奈川県、栃木県、岩手県、新潟県、富山県、熊本県などで、学生や院生たちと一緒に、独自の調査を行ってきた。文部省科学研究費補助金の環境科学特別研究では地下水班の代表を4年間、また筑波大学では「地球環境変化特別プロジェクト」の代表を5年間つとめた。日本学術会議では「地

球圏-生物圏国際協同研究計画（IGBP）」の日本側の責任者であった。環境庁では「健全な水循環の確保」に関する報告書をまとめた。

それでも私が環境の専門家と自称することをためらっていたのは、これまでの環境科学や環境学について、いささか疑念を抱くところがあったからである。わが国における最初の環境研究は、「公害発型研究」であった。この種の研究は、ダイオキシンや環境ホルモンなどについて最近も行われており、十分な社会的意義をもっている。私もかつて、「地盤沈下の原因は地下水の過剰揚水であるから、直ちに揚水規制を行うべきである」と主張して、世間を騒がせた経験をもっている。しかし当時も地盤沈下の専門家とは名乗らなかった。次いで、わが国では「公害解決型研究」が行われた。COE-ICCS環境研究会でも、山西省のアルカリ土壌の改良について、石炭火力発電所の脱硫装置やアルカリ土壌改良剤の問題を取り上げた。また、これまでに、環境経済学や環境社会学のように、既存の学問領域の延長上で行われる「環境〇〇学的研究」も多数行われてきた。環境哲学、環境倫理学、環境物理学、環境化学、環境医学、環境工学、環境農学などの本も多数出版されている。この事実は、すべての学問領域で環境の研究が行われてきたことを示している。そして、環境問題については、これらの関連分野が参加した「学際的研究」の必要性が叫ばれ、そのようなプロジェクトも実行されてきた。

しかし、環境問題について上に述べたような経験を重ねてきた私は、COE-ICCS発足時、「はたして学際的研究だけで中国の環境改善が可能だろうか。環境問題の超克には、もっと根本的に考え

なければならぬ問題があるのではないだろうか」という疑念をもった。中国の環境問題研究の方法論としては、次の二つの道がありえた。

A. 地域学→中国学→中国の環境問題

B. 哲学→新しい環境学→中国の環境問題

私は地理学の出身であり、日本学術会議へも地理学を母体にして会員に選出された。そんなこともあって、これまで地域学や地域研究については、真剣に考え、日本学術会議でもこの問題に関する討議に参加したことがある。しかし私には、どう考えても、Aのアプローチで中国の環境問題を研究して実りある成果が得られるとは思えなかった。そこで思い切って、Bのアプローチをとることにした。つまり私なりの環境学を構築し、それを基盤にして中国の環境改善の研究を行ってみようと思ったのである。もちろんリスクは覚悟した。しかし、私はまだ助手の身分だった頃、職務上の理由で、自分の研究領域を気候学から水文学へと移したことがある。その時、研究テーマとして「水循環」をえらび、私なりの水文学をつくり上げたという経験をもっている。ちなみに、現在の世界の水文学の研究は「水循環」を中心テーマとして行われている。私としては、「COEで、最後のご奉公だ」という気持ちだった。その成果が本書である。

私は「環境」についての自分の思考を発展させるために、具体的に、次のような方法をとった。まず、「環境」の非専門家として、「環境」について抱いた疑問を、どんな些細なことであっても、また難しいことであっても、「問」として設定することにした。そして設定した「問」に対する非専門家なりに納得できる「答」を、それぞれの分野の専門家による著書等を読んで得るように努めた。「広範な分野にわたる環境問題ではあっても、その道の専門家を目指すのならば、関連分野の専門学術誌に載った論文に眼を通さなければならない」という専門家からの非難は、当然予想される。だが、専門分野の分化しすぎた今日、スーパーマ

ンに対してでなければそれは無理な注文である。私が設定した「問」の例を挙げてみると、「なぜ自然を守らなければならないのか」や「企業の利潤はどこから生まれるのか」などがある。例えば、後者の「問」について手元の辞書を引いてみると、『広辞苑』の第二版補訂版（1975）には、利潤とは「一企業の総収益から一切の生産費、即ち地代・賃金及び利子などを控除した余剰で、企業家の所得となるもの。生産過程でうみだされる剰余価値の転化した形態」とある。また『大辞林』の第三刷（1989）には、「企業において、総収入からすべての費用（賃金・地代・利子・減価償却費など）を差し引いた残り。生産過程で労働力の搾取によって生み出される剰余価値の転化した形態という見方もある」とある。理系で育った私にも、これらの定義がイデオロギーに過ぎないことはすぐに分かる。「産業資本主義活動による利潤は、自然環境の劣化とのトレードオフで生まれるのではないのか」という、私が当初にたてた「問」に対する納得の行く「答」は、「資本主義とはたんに差異性から利潤を生み出すシステムにすぎないにもかかわらず、その背後にもっと深遠な原理をもとめてしまった」（岩井克人、2006）という文章と出会うまでは、得られなかった。脳や、心や、哲学についても様々な「問」を設定して、私なりの「答」を探してきた。

5年という期間は、短いようで長い。医師の卵は5年で育つし、大学院の修士課程は2年、博士課程は3年で修了できる。非専門家でも、5年かければ専門家に近づくことはできる。2003年度のCOE-ICCS国際シンポジウムで発表した「フィールド科学者の考える環境」を書いた時点では、私はまだ非専門家であった。中国の環境問題の実情もよく知らなかったし、中国で、環境研究のフィールドワークを行うことができるとも思っていなかった。ただ私の脳の中で、環境危機、デカルト的二元論、ポストモダン、現象学、現代化、資本主義、社会主義、中国共産党、環境改善技術、

贈与、共同体、自然の価値、新しい学、などの言葉が、雑然と行き来しているだけだった。

2004年度のCOE-ICCS国際シンポジウムで発表した「中国とアジア世界の環境問題に関する方法論的考察」を書き上げた時点では、私が設定した「問」についての「答」が、少しずつ出始めるようになっていた。つまり私が設定した「問」に対する「答」を、すでにその分野の専門家が用意してくれていたということである。私が設定した「問」に対する「答」が本として出るまでの間には、当然、一冊の本が出版されるまでには何年かの時間を要するから、時間的なずれがあったのであるが、私には、私とその人とが同時並行的に研究を行っているように感じられた。つまり、「多くの人が同時並行的に、環境や自然について考えているのだが、それらの成果は、まだ、新しい環境学としてはまとめられていない」と感じたのである。このことを知って、私は大いに勇気づけられた。

そこで、「中国とアジア世界の環境問題に関する方法論的考察」と「環境改善技術体系化の基礎」の2論文を、日本語と中国語で、『現代中国環境論序説』という題で一冊の本にまとめた。この本は、2005年12月に北京で開催したCOE-ICCS国際シンポジウムの「討議用資料」として準備したものであり、多少の反響もあった。このシンポジウムでの環境セッションのテーマは、環境研究会の最終目的である「現代中国環境論の構築」であり、この環境セッションを開催した時点で、主査の考えを明らかにしておく必要があると考えたからである。このシンポジウム用に私が別に用意した論文が、愛知万博を期に、それまでの考えを再整理した「現代中国環境論への招待」であった。

「健全な水循環の確保」は、それ以外の7論文とは性質が少し異なる。これは、日本地下水学会2004年秋季熊本大会公開シンポジウム『水質・水量から見た健全なる地下水循環を求めて——熊本地域からの発信——』での基調講演用原稿に、

若干手を加えたものである。環境庁の「健全な水循環の確保」に関する報告書をまとめた後で、私の脳の中では、「健全な水循環」から「健全な自然」へとという思考の発展があった。また、2004年8月に実施した山西省のフィールドワークへ出発する前に、北京の中国科学院地理研究所で、このテーマで講演も行っていたので、この本に一つの資料として加えたものである。

ここまで述べた5論文によって、一般論としての私なりの考察はほぼ終了した。その結論は、環境問題の超克には、「新しい知」に基づく「次なる社会システム」の構築が必要である、というものだった。「次なる社会システム」の構築を必要としているのは、決して中国だけではない。日本も、アメリカも、アジアも、ヨーロッパも同様である。そこで、「新しい知」の具体像を求めて、「自然と人間の統合」では、環境研究で不可欠な文理融合への一つの試みを行ってみた。その経緯は、この論文の冒頭に記したとおりである。この論文を書く過程で、私は「新しい知」のモデルとなり得る、ラズロや、ウィルバーや、清水らの「新しい哲学」と出合うことになった。デカルト的二元論と批判的に向き合ってきた私には、量子論を取り入れたラズロの哲学はとても眩しいものだった。

正直に言うと、「麗江古城の環境論」は意図して生まれた論文ではない。環境研究会で私の手伝いをしてくれている朱安新さんが、2006年に入ってから、突然、麗江古城の社会学的調査を自費でもやりたいと言い出した。私も2005年夏のフィールドワークで、麗江古城に魅せられていた一人だった。朱さんがそんなに望むのなら、4月初旬に、環境研究会の仕事として麗江古城の調査をやることにしようと思い、私と宮沢哲男さんが調査に同行することになった。麗江古城は纳西族の誇る「水のまち」である。私たち二人が加われば、当然、中心テーマは「社会学」から「水と社会」に変わる。宮沢さんは名古屋から広州経

由で麗江へ飛んだ。私と朱さんは上海での打ち合わせがあったので、上海から昆明へ飛んだが、その機中で、二人で相談して、ウィルバーの『万物の理論』を調査の方法論として採用することに決めた。麗江古城では、毎日、昼食のあとで「三人ゼミ」を行いつつ、調査を進めた。

私たち愛知大学の環境研究会メンバーは、麗江古城調査の前に、すでに山西省と雲南省の概況調査を終えていた。しかしこれら二つの調査は、中国科学院地理研究所と共同で行ったものであった。だが麗江古城の調査は、事前打ち合わせなしの、単独調査である。朱さんが中国人だから、トラブルが発生しても何とかなるだろうと楽観的ではあったが、新疆で日本人の研究者がGPSで調査中に当局につかまって罰金刑を科せられたというニュースを聞いた後だったので、どこまで現地調査をすることができるのか、半信半疑だった。私たちもGPSや、pH測定器や、電気伝導度計を持参していた。しかし調査中には何のトラブルも発生しなかった。さすがに、年間400万人余の観光客を受け入れているといわれる麗江古城ではある。

最後に残ったのが「倫理性」の問題であった。産業資本主義という列車は、「欲望」という暴走機関車に引っ張られているが、「倫理性」というブレーキには不備がある。東京大学の岩井克人教授は、当面、資本主義に代わりうるシステムは出現しないという。それが真実なら、21世紀を生

きる人類はこの列車の乗客であり続けるしかないことになる。この列車に必要とされる「倫理性」が、保守主義が重んじる「伝統や規範」なのか、市民主義が重視する「思いやり」や「やさしさ」なのかは、今後に残された問題である。「環境問題に必要な倫理」は、2006年11月に開催されるCOE-ICCS国際シンポジウムの総合セッションの第1パネル「各研究会主査による基調報告」用に書かれたものである。

今後の問題になるが、私は「新しい知」に基づく環境研究や環境保全のための重要なツールとして、無料で、誰でも自由にアクセスできる「環境情報基地」という、多言語で検索可能な21世紀型データベースの構築が必要だと考えている。もちろんこの「基地」には、中国環境情報も貯蔵されなければならない。暴走列車の乗客である人類は、21世紀を生き抜くために、教育や研究の中心を「環境」に移すべきである。すべての人が「環境」について考え、「環境改善」に向かって行動するためのツールとして、「環境情報基地」の構築には、いかに多額の資金を投入したとしても多すぎるということはない。その存在価値は、宇宙ステーションや弾道ミサイル防衛(BMD)などをはるかに上回るはずである。「環境」の視点から考えると、すでに世界は一つである。日本政府が「日本版グーグル」の構築に動き出したという情報もある。是非ともその中に、「環境情報基地」の機能を組み込んでもらいたいと思う。